

編集後記

編集長 小西 敦

今秋も、ノーベル賞の発表がありました。経済学賞の受賞者は、ハーバード大学のクラウディア・ゴールドフィン教授です。ノーベル財団のウェブサイトによれば、受賞理由は、"for having advanced our understanding of women's labour market outcomes"とされています。同教授の業績は、「主要産業が農業から工業に移り変わることに伴って既婚女性が仕事と家庭を両立することが困難になることなどから女性の就業率が低下する」としたうえで、「経済のサービス化が進むことで就業率が増加するとして、U字型のカーブを描く構造を初めて明らかにし」たこととされています（NHK NEWS WEB 2023年10月9日版）。現代にふさわしい受賞者選考だと思います。

45年前の1978年のノーベル経済学賞の受賞者は、ハーバート・サイモンです。サイモンの業績は幅広く、彼は「知の巨人」とも呼ばれ、人工知能の父とも称されています。ここで、彼の提唱した「経営的人間」の特徴を、真淵勝『行政学 新版』（2020年、有斐閣）77頁によって私なりにまとめると、次のようになります。第一に、経営的人間とは、全ての選択肢を正確に評価・予測し評価基準に最も適合する枝を選ぶ完全モデルではなく、知識や予測の限界を前提にする満足モデルで描かれる人間像であること、第二に、時間的制約の中で何らかの決定を下さなければならない経営的人間は、時には満足基準を下げて、意思決定を行うこと、です。

DX時代の現在でも、こうした人間像は、多くの人の共感を呼ぶと思います。現在の大きな課題は、自分は満足モデルで行動するにもかかわらず、他人の評価は完全モデルで行うという風潮です。例えば、マイナンバーカードに関する報道等を見ても、これを感じます。9千万枚以上発行されているカードにおいて、1千件のミスが発生しても、発生確率は約0.001%です。ミスが致命的なものとなる場合は、さらにまれだと思います。一方、交通事故で亡くなる方は、年々減少していますが、2022年で2,610人、全人口の約0.002%です。行政改革推進会議ワーキンググループの2022年5月の提言の副題は「行政の『無謬性神話』からの脱却に向けて」です。こうした動きに期待しています。

本号では、ご覧のとおり、豊富な論文が掲載されています。投稿していただいた皆さま、巻頭言をご執筆いただいた竹下研究科長、お忙しい中、限られた時間において査読やその準備をしてくださった先生方、本誌の発行にご尽力くださった編集委員をはじめとする先生方、さらに、細部にわたり丁寧な事務全般を行ってくださった増子かおり様、にお礼を申し上げます。

本紀要は、学術誌として、安易に満足基準を下げることはできません。そうした条件の下、現在の本研究科の紀要として求められる役割を果たせるよう、努めてまいります。論文等のご寄稿に加えて、本紀要に対するご意見・ご感想もお待ちしております。